

第1章 序

1.1. 研究概要

1.1.1. 研究の目的

1910～30年代に始まり、次第に骨格が形成された、いわゆる「モダニズム建築」は、第二次世界大戦後の復興期に幅広く普及した後、1970年頃のポスト・モダンの時期に厳しい批判を受けたが、その後、改めて再評価され、一定の価値を認められてきている。21世紀に入って、20世紀モダニズム建築は歴史的な存在となり、改めてその歴史的な意義を問い直す時期にきた。方向性の見えにくい現代建築界がどのように今後、展開していくのかを考える上でも、20世紀モダニズム建築を改めて客観的、批判的な目で吟味し、その形成過程がどのようなものだったかを再定義することは、近代建築史学の重要な課題の一つであると考えられる。

その際、とりわけベルリンとその周辺を舞台にしたモダニズムの形成は、その波及効果を見ても重要な検証対象となろう。20世紀初頭には、一方でやや復古的なイメージのある新古典主義の傾向を示した P. ベーレンスを介して W. グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエ、A. マイアーらが登場し、また他方で H. ヴァン・ド・ヴェルドのユーゲントシュティルに続くように、B. タウトと M. タウト、H. ヘーリンク、H. シャロウン、E. メンデルゾーンらの表現主義建築家たちの群が現れ出た。そこではユーピア志向の多様な広がりが見られたが、1920年代半ばにモダニズム建築は新即物主義へと移行し、デッサウ・バウハウスに象徴されるような機能的合理性、幾何学的形態を特徴としつつ自由な空間デザイン方法に到達し、後の時代に決定的な影響を及ぼすこととなった。しかし、そのベルリンを中心とした動向が1900年代、1910年代にどのようにして、またいかなる背景をもって始まるのか、またそれに先立つ19世紀においてどのような準備がされていたのか、一般にあまり注目されてこなかった。今日、モダニズム建築を再評価する上で、モダニズム形成過程の再吟味が必要である。

当研究者はドイツ・モダニズム、その一世紀前のドイツ新古典主義の研究を継続して行ってきたが、このベルリン・モダニズム建築形成において、新古典主義、具体的には建築家 K. F. シンケルが築いていたベルリンにおける建築思想が大きな影を落としていたのではないかと考えている。モダニズムとは伝統を否定する姿勢であるが、シンケルもまた19世紀初期の時代に改革精神に染まり、建築作品や建築活動に反映させた。そこに築かれた建築思想が継承、発展せられて20世紀初期のベルリン・モダニズムを導き出したと想定できる。つまり、20世紀モダニズ

ム建築を改めてより永い時間軸の上に位置づけることによって、その本来の意義が見えてくるように思われる。

第二次大戦後の復興期、高度成長期におけるモダニズムの世界への波及、ポスト・モダン期の機能合理主義的なモダニズムへの批判は、いずれも近視眼的な一面があったように思われるが、その原因は20世紀の歴史のみを視野に収めていて、より深い底流を理解していない点にある。むしろ18世紀中頃の新古典主義勃興期に始まるとされる近代という大きな時代枠の中で、構造的に起こっていた変化の過程を広く視野に収めることにより、モダニズム建築の本来の意義がより鮮明に浮かび上がると考える。古代、中世、近世、近代という大きな枠組みの上で、近代というものが何をなそうとしてきたのかをここで無視してはならない。

様式的な観点で見れば、18世紀中頃に始まるこういった広義の近代において、18～19世紀の新古典主義と20世紀前半のモダニズムは二つの大きな波をなし、21世紀初期の現代は第三の波が始まろうとしている時期と考えられ、近未来の建築デザインを議論する上でも20世紀モダニズム形成過程の構造的な解明は益するものが多いと思われる。20世紀的な近代は一区切りついたが、広義の近代は決して終わってはおらず、しっかりと持続している。

一般には20世紀初期の前衛的な運動をなしたモダン・ムーブメントにおいては幾何学的な合理主義の傾向が強いものと理解されてきているが、ドイツでは表現主義と呼ばれることとなる独特の非合理主義的な傾向があった。それは一過的であって、近代建築史上の徒花と見なされることもあったが、少なくともドイツでの現象をさぐる際には、これを含めて総合的に吟味しないで、モダニズムの全体像を見誤る可能性がある。表現主義を特別扱いして過小評価あるいは過大評価する向きもあるが、いずれも真の総合的な理解を阻害しているように思われる。

形態的な特性に着目すると、表現主義には放射状の形態をベースに中心に集まる、ないしは中心から爆発的に広がる建築形態がしばしば見られる。他方、構成主義には定まった中心がなく、直交座標系の上に幾何学形態群が弛緩的に展開しつつ全体にバランスするものも多く見られる。必ずしもそのような二つの傾向に限定できるものではないが、そこに見られる建築形態の構成方法における集中的な形態構成と分散的な形態構成、また直交座標系に基づく形態とそれを逸脱する形態といったものは、造形心理の上で見極めておくべき点である。また表現主義においてはその時代の時代精神とあいまって、人間的、社会的な強い情感を背景にしたメッセージ性が強く、芯を持つ傾向にあった。新即物主義、機能主義においては客観的な外的、環境的要因にフレキシブルに対応すべく、分散的な形態が有利に働くという一面もあった。一般にインターナショナル・スタイルという名称に総括されていったモダニズム建築は、幾何学的形態システムを基本としてつつ、多様に展開する機能的欲求に柔軟に

従い、合理的かつ自由な造形を可能としてもものと考えられているが、ドイツではそのような段階に達する直前に、表現主義のより幅広い造形世界を展開していた。それは19世紀からの伝統的な建築形態観、またその最後の段階のユージェントシュティルからの連続上における、奥行きのある深い造形的な現象であった。

19世紀初期のシンケルは一般には新古典主義の荘重な建築作品が知られ、整然とした合理的形態秩序をもとにしていたと考えられている。他方で彼はロマン主義の傾向を持ち、ゴシック様式の記念碑や各種の建築プロジェクトを残している。B. タウトはシンケルのそのようなゴシック様式の記念堂建築に注目していた痕跡があり、抽象化して表現主義的なユートピア建築構想に転換しようとしたように窺える。そのゴシック様式に感情移入した改革精神は、近くに居た W. グロピウスに乗り移り、バウハウスの設立期に影響していたようである。他方、P. ベーレンスはシンケルの新古典主義の様式や建築手法に倣おうとし、より抽象的な20世紀新古典主義を開拓し、それが直接的に弟子である W. グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエへと継承され、構成主義的な造形手法へと発展したと考えられている。つまり20世紀初期の表現主義、構成主義は少なくとも局所的な歴史的事実において、それぞれにシンケルとのつながりを持っていた。しかし、視野を広げてみれば、そのつながりは決して局所的と見限ることはできないようである。

システムティックな建築形態を展開した新古典主義建築家ではあったが、そのようなシンケルのロマン主義的な側面では、表現主義につながるようなゴシック尖塔を聳えさせる集中式の建築形態が見られ、整然とした列柱廊やエンタブラチャーによる立体格子の骨組が顕著であり、また住宅建築には構成主義につながるような分散的な形態も見られる。モダニズム建築の形成過程を考える際に、ベルリンにおけるシンケルからの系譜に焦点を当てることによって見えてくるものが多々あるように思われる。ベルリン・モダニズムは突然現れたのではないようである。建築形態の特性に着目してその系譜を精査することで、歴史的な軸と進化の系譜を見出すことができれば、モダニズムの形成過程の筋道が明らかになってこよう。

そのような観点で調査研究を進めた結果、建築形態的には、集中式空間をなす記念堂建築の系譜、幾何学的な基盤としての骨組構造の系譜、分散的に安定させるピクチュアレスク的な形態構成の系譜という三つのテーマを見出し、整理することとした。これらは幾何学的な原理に照らして、求心・遠心的な空間構造、直交する立体格子の空間構造、両者の原理が弛緩した混成的な秩序の空間構造と読み替えることもできる。個々の建築作品は個別の条件や成立環境に影響され、それぞれの建築形態は純粋な形態とはなり得ず、多様で、混交し、複合的である。したがってここでは同一の建築作品であっても、分析の視点によっては異なる

テーマのもとで分析対象となることもある。個々の建築作品としての評価ではなく、その背景に潜む造形原理を明らかにすることが、研究の目的だからである。そのようにして、建築家たちが依拠したデザインの構造を明らかにすることに務めるのである。

1.1.2. 研究の方法

本研究は概ね19世紀初期から20世紀初期の約百年間の間における建築作品の変遷に着目し、その建築形態の基本的な造形原理を抽象的に捉えて分析するものである。したがって、まずはこの間の建築史について、一定の概括的な知識を必要とするが、それは筆者が永年にわたって蓄積してきた建築史的な知識がベースとなる。造形原理の問題に関しては、歴史的また現代的な建築デザイン理論における知見と議論をベースとする。その上で、モダニズム建築形成過程について焦点化すべき着眼点を見出し、個別の具体的な分析テーマとして据える。そして、個々の分析テーマについて、手持ちの研究資料や文献に加えて近年の新しい資料、文献を収集し、情報を整理した。上述のような研究目的からは、三つのテーマに絞り込むことができたが、それらについて論証の必要に応じてさらに建築作品を抽出し、また資料の収集を図った。

各建築作品について、文献等を通して図面資料等の収集を行い、事前に問題点を分析、整理した。その上で個別建築作品について必要な現地調査を実施した。現地調査としては建築作品の概要の把握、必要な場合は内部の視察を実施した。現地においては、準備した建築設計図面等のコピーないしノートパソコンに表示した画像データと対照させつつ詳細な点の確認を行い、建築作品の必要箇所を写真撮影した。現地調査は予算等の関係から各年で10日前後とし、集中的にできるだけ多くの建築作品に当たった。また当地の図書館、資料館で資料調査を実施し、特に図面等の収集に務めたが、近年は図面資料等がWeb上に公開されている場合もあり、国内で事前にある程度研究作業を進めることができる場合があった。

1.2. 研究経過

3年間の各年度において、ドイツ連邦共和国等への調査旅行を通じて史料調査、建築作品の現地調査を実施し、各年度における個別テーマでの研究発表を行い、最終年度において総括的な本研究成果報告書を作成した。

1.2.1. 平成25年度

年度別テーマ： ロマン主義、表現主義の建築に関する史料調査、現地調査

調査日程： 2013年8月9日～8月19日

訪問先： ドイツ連邦共和国：ベルリン、グランゼー、ニーデン、
コリーン、リヒテンフェルス
ポーランド共和国：マルボルク

調査内容： K.F.シンケルに関して、設計作品のベルリン市クロイツベルク戦勝記念碑、グランゼー市王妃ルイーゼ記念碑の現地調査、建築設計作品に影響のあった中世マルボルク城の調査。B.タウトの表現主義的形態、色彩建築論への歴史的影響等に関連して、コリーン修道院教会堂、ニーデン村教会堂、フィアツェーンハイリゲン修道院教会堂の現地調査。M.メンデルゾーンの設計案スケッチ集をベルリン市の芸術図書館 (Staatliche Museen zu Berlin, Kunstbibliothek) において閲覧。

研究作業：特定の建築作品について詳細な吟味をし、研究室学生にCADソフト、CGソフトを用いてワークステーション上でCG画像を作成させ、詳細な分析を行った。それは三次元的な復元を通して、二次元的な図面や写真資料などからは把握できない作品的特徴を見出すことに活用した。その成果をもとに、建築史的、建築デザイン論的な観点から分析、評価を行った。

1.2.2. 平成26年度

年度別テーマ： 19・20世紀新古典主義、表現主義の建築に関する史料調査、現地調査

調査日程： 2014年8月8日～8月18日

訪問先： ドイツ連邦共和国：ベルリン、ハーゲン、ニュルンベルク、ミュンヘン

調査内容： K.F.シンケルに関して、幼少期を過ごしたノイルツピン市において資料調査、ベルリン市グリーニケにおいてシンケル設計作品の現地調査。B.タウト、P.ベーレンスに関連してハーゲン市で資料調査。P.ベーレンスに関連して、ベルリン市において設計作品ヴィーガント邸、小型モーター工場の現地調査。20世紀新古典主義建築に関連して、ニュルンベルク市の旧ナチス党大会場跡の現地調査。ミュンヘン市におけるL.v.クレンツェ等設計の19世紀新古典主義建築作品の現地調査、アルテ・ピナコテークにおけるシンケル等の絵画の調査。

研究作業：前年度と同様の方法で建築作品の分析、評価を行った。

1.2.3. 平成27年度

年度別テーマ： 新古典主義、モダニズムの建築に関する現地調査

調査日程： 2015年10月5日～10月15日

訪問先： ドイツ連邦：ベルリン、ポツダム、ライプツィヒ
ポーランド共和国：ヴロツラフ

調査内容： K.F.シンケル設計作品に関して、ポツダム市のポモナ

神殿、ヒッポドローム、およびシンケル派建築家の設計作品に関連してポツダム市のプフィングストベルク・ベルヴェデーレ、オランジェリー宮の現地調査。ベルリン市内のB. タウト、P. ベーレンスの建築作品の現地調査。記念碑建築に関連してライプツィヒ市の諸国民会戦記念碑。ヴロツラフ市のモダニズム建築である百周年記念ホール、ドイツ工作連盟展ジードルンク等を現地調査。

研究作業：前年度までの成果をベースに、研究成果報告書の作成に伴って補足的に資料収集を行いつつ、建築史的な分析、評価を行った。